

特別活動の指導法における教材活用の一視点

—児童会・生徒会活動理解に向けた映画版『コクリコ坂から』の活用方法をめぐって—

歌川 光一・岡 邑 衛

1. 問題の所在

(1) 教職課程コアカリキュラムのインパクトと特別活動の指導法

本稿は、教職に関する科目「道徳、総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目」に含めることが必要な事項の一つである「特別活動の指導法」において、教職志望学生の児童会・生徒会活動理解を促すための教材活用の一視点を提示するものである。具体的には、児童会・生徒会活動への積極的参加経験のない学生も視野に入れつつ、活動の特質の理解に向けた、スタジオジブリ制作アニメ映画『コクリコ坂から』の教材としての活用方法の可能性について、その制作意図やストーリー展開等に着眼しながら検討する。

2017年7月に「教育職員免許法及び同施行規則に基づき全国すべての大学の教職課程で共通的に修得すべき資質能力を示す」教職課程コアカリキュラムが発表され（文部科学省初等中等教育局教職員課 2017: 90）、2019年度より「教職に関する科目」に関して、「教職課程の担当教員一人一人が担当科目のシラバスを作成する際や授業等を実施する際に、学生が当該事項に関する教職課程コアカリキュラムの「全体目標」「一般目標」「到達目標」の内容を修得できるよう授業を設計・実施し、大学として責任をもって単位認定を行うこと」が必要になる（同上: 92）。

近年の教師としての職業的社会化に関する研究において、教職志望学生の学校経験は児童・生徒としてのそれであり、授業を受けた経験や教師との対面的な相互作用が密だったとしても、そのこと自体が「教職への志向性を高めはしても、将来の有効な教育実践に結びつく教師のパースペクティブの生成にまで寄与するものではない」（太田 2012: 184）という指摘がある。教職課程コアカリキュラムによる教員として修得すべき資質能力の規準化は、教職志望学生の学校経験と養成教育の接続の問題をより一層際立たせるものであり、養成教育における学生の学校経験の教員・学生本人の把握・省察は重要性を増すと考えられる。

特別活動の指導法¹についても、その全体目標²、一般目標、到達目標が提示されたが、特別活動は必ずしも体系的に行われているとは限らず、教職志望の学生であってもその内容の認知が十分でなかったり、参加度合いの個人差が大きい傾向にある（一盛・大谷 2016）。特に小・中・高等学校時代における積極的参加経験がないためにそのイメージすら湧きづらい教育内容があるとすれば、特別活動の指導法の授業におけるリメディアルの配慮が必要となる。（歌川）

(2) 日本における児童会・生徒会活動をめぐる動向

① 児童会・生徒会活動への関心の高まり

特別活動の教育内容の中でも、近年頃に教員志望学生が共通イメージを形成する社会的必要性に迫

られているのが児童会・生徒会活動であり、それらへの関心も高まりつつある。2008年に公示された現行の学習指導要領では、児童会・生徒会活動を通して「望ましい人間関係を形成し、集団や社会の一員としてよりよい学校生活づくりに参画し、協力して諸問題を解決しようとする自主的、実践的な態度を育てる」ことを目標としている（文部科学省 2008/2010）。2015年の公職選挙法改正に伴い、2016年より選挙権が18歳以上に引き下げられ、市民性教育や主権者教育の重要性が叫ばれる現在、社会の一員として将来的に、様々な問題を自主的に解決していく児童・生徒を育成することが求められているのである。

このように児童会・生徒会活動をはじめとする特別活動に注目が集まったのは初めてのことでない。第2次世界大戦敗戦後、1947年に施行された日本国憲法の下、民主的な国家を形成する国民を育成することを目的として、児童会・生徒会活動についての研究は盛んに行われていた。これについての一つの指標を得るため、日本の論文検索サイト CiNii に登録されている論文数の変動を見てみたい。「児童会」「生徒会」というキーワードでそれぞれ検索した結果、ヒットした論文数の合計値を示したのが図1である（1950年以降、2017年7月19日現在まで。ただし、1972年12月『現代教育科学』に「集団の自治と児童会・生徒会活動」が特集されているが、1冊の雑誌に児童会・生徒会活動に関する複数の論文が掲載されているイレギュラーなケースと考え、除外している）。なお、参考までに、児童会・生徒会活動とほぼ同様の目標を掲げる「学級活動」「ホームルーム活動」の年代別論文数もほぼ同様の結果である（図2）。

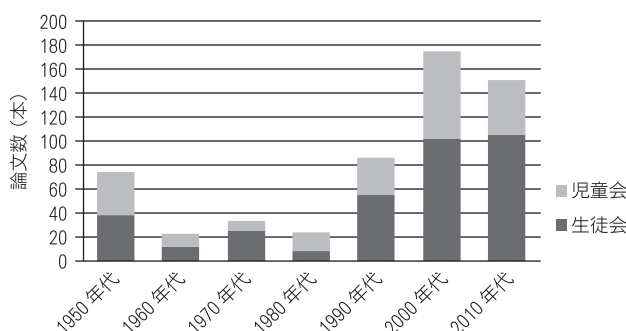


図1 「児童会」「生徒会」年代別論文数

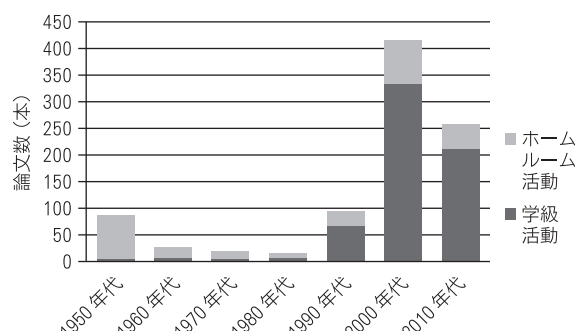


図2 「学級活動」「ホームルーム活動」年代別論文数

児童会・生徒会活動の論文数が1960年代、1970年代、1980年代に極端に少ないのは、この時期に児童会・生徒会活動が形骸化していることを示している。その理由として、戦後民主化の流れが一旦落ち着いたことに加え、この時期は受験競争の激化、校内暴力、不登校等の問題により、児童・生徒の自主的な運営による児童会・生徒会が徐々に少なくなってきたことが考えられる。すなわち、この時期は様々な問題を抱える学校において教員が上から抑えることによって学級、学校生活が成立していたが、1990年代以降は再び特別活動を通して、学級や学校づくりに児童・生徒が主体的に参画することが求められるようになったのである。その重要な活動のひとつとして学級会・ホームルーム同様、児童会・生徒会を挙げるができる。

現在、教員の多くがこの児童会・生徒会の形骸化した時期に小・中学校生活を送ってきたことを考えると、教員自身が子ども時代に、近年求められているような児童・生徒の自主的な活動を経験してこなかった可能性があり、指導に不安を覚える教員が少なくないことは容易に想像できる（それは、大学で特別活動の指導法を担当する教員にとっても同じことである）。

②児童会・生徒会に対する当事者意識の欠如

一方、児童会・生徒会活動の存在自体を認識していても、それらは一部の生徒（児童会・生徒会役員）のものだと感じている学生が多いことを盛満（2013）は指摘している。本来、児童会・生徒会は全児童・生徒によって組織されるはずのものであるが、特別活動の指導法を履修する教員志望学生の多くがそのような当事者意識を培ってこなかったというのである。同様に大日方（2017: 59）は「全校での活発な生徒会活動を中学生時代や高校生時代に経験することのなかった大学生たちが、教職課程を経てやがて教師になっていくということ」について問題提起を行っている。また、山田（2017）は中学生に対する質問紙調査の分析を実施し、生徒会役員経験者とそれ以外の生徒との比較から、生徒会役員経験者はそれ以外の生徒に比べて、生徒会は一部の生徒会役員のためのものではなく、全校生徒のためのものであると考える傾向にあり、生徒会役員を経験しない者との生徒会に対する意識の乖離がより大きくなることを指摘している。

一方で、山田（2017）はフランス・ドイツ・オーストラリアでは日本と比較して、生徒会活動は生徒会役員のためのものであるという意識がより強く持たれていることも指摘している。すなわち、諸外国と比較すると、日本では生徒会活動が生徒会役員だけでなく、そのほかの生徒にもより多くの影響を及ぼしている可能性があり、今後、役員以外の生徒が活躍する場を広げていくことは可能であるとしている。

とはいえ、歴史的に見れば、先の盛満（2013）や大日方（2017）が示したように、教職志望の大学生の多くは児童会・生徒会に対する当事者意識が欠如していると言わざるを得ない。教育実習担当教員を対象に質問紙調査を実施した石田ら（2004）によると、教育実習校の実習担当教員らは児童会・生徒会活動に関して、教育実習生に最も必要なのは児童会・生徒会活動についての知識や理論であると考えていることを明らかにしている。このことは教育実習生の多くが児童会・生徒会活動に対しての当事者意識を欠いていることと無関係ではないだろう。

以上のような現状に対し、例えば大日方（2017）は教員志望の学生に特別活動論の授業で実践させている「模擬生徒会活動」を紹介している。学生に「生徒会執行部」役や「教師」役などの役目を与え、大学内の実際の問題を解決するよう交渉させるのである。本来であれば、小学校や中学校、高等学校で経験しておくべきことを、大学で模擬的に経験することによって学ぶ実践的な活動である。児童会・生徒会活動を経験していない大学生であっても、興味を持って取り組めるよう、「特別活動の指導法」の授業に工夫が求められていると言える。

③新学習指導要領（2017年3月告示）における児童会・生徒会活動

上記のような経緯を踏まえ、①で市民性教育や主権者教育について触れたように、今後、児童会・生徒会活動は児童・生徒にとってますます重要な意味を持つようになることが予想される。以下では、2017年3月に告示された新学習指導要領（小学校・中学校）と、現行の学習指導要領とを比較し、児童会・生徒会活動の記述の変化を概説する。

まず、新学習指導要領における児童会・生徒会活動の目標は「異年齢の児童（生徒）同士で協力し、学校生活の充実と向上を図るための諸問題の解決に向けて、計画を立て役割を分担し、協力して運営することに自主的、実践的に取り組むことを通して、第1の目標に掲げる資質・能力を育成することを目指す」とある（文部科学省 2017a: 21, 丸括弧内は文部科学省 2017b: 20）。現行の学習指導要領の記

述と比較して、大枠としては同様の内容であるが、「異年齢」という言葉は、現行の学習指導要領では「内容」で触れられていたが、新学習指導要領では「目標」に「格上げ」されているところに一つの強調点を見出すことができる。これは「第1の目標に掲げる資質・能力」とも関係するのだが、新学習指導要領の目標では、「多様な他者との協働」や「合意形成」（文部科学省 2017a, 2017b）というように、他者とのさまざまな「ちがいを乗り越えていく資質・能力の育成を目指している。学校という集団の中では、年齢の違いも一つの大きな「ちがい」として捉えられているのである。児童会・生徒会活動は、たとえば上級学年の児童会・生徒会役員の限られた児童・生徒による活動ではなく、下級学年から上級学年全体の活動である、という意味も読み取ることができ、どの学年の児童・生徒であっても、学校の児童会・生徒会活動に自主的、実践的に取り組むことが求められているのである。

また、新学習指導要領の児童会・生徒会活動の「内容」には、新たに児童会・生徒会の「組織づくり」という言葉が追加されている。この点に関し、以下のように解説されている。

自発的、自治的な活動を実現させるために、児童が、教師の適切な指導の下に、発意・発想を生かして児童会活動の活動計画を作成することを大切にすることである。すなわち、代表委員会やそれぞれの委員会等の活動を進めるために必要な組織や役割を、自ら見だし、話し合って設置するなどの主体的な取組を大切にすることである。〔中略引用者〕主権者教育など、社会参画の態度を養う観点から児童会役員を児童の投票によって選出することも考えられる。その際は、児童の発達の段階を踏まえ、立候補等の方法、投票する児童の範囲、投票の時期、投票に関わる事前指導などについて十分に配慮した上で、投票することの意義の理解を促したり、児童会としての本来の活動が十分に展開できるようにしたりする必要がある（文部科学省 2017a: 86-87, 下線引用者）。

生徒会における組織等については、各学校の生徒の実態や特色をもって設置するものであるが、一般的には、生徒全員で話し合いを行う「生徒総会」を置くとともに、「生徒評議会（中央委員会など）」といった審議機関、「生徒会役員会（生徒会執行部など）」や各種の「委員会（常設の委員会や特別に組織される実行委員会など）」などの組織から構成することが考えられる。／〔中略引用者〕／なお、生徒会長等の生徒会役員や各種委員会の委員長等の決定に当たっては、生徒会規則等に則って、公正な選挙等により選出されることが望まれる。生徒自らが、選挙管理規則等に従って役員選挙等を運営することにより、生徒会活動は、自治的な活動であるということを一層自覚することになる（文部科学省 2017b: 74, 下線引用者、／は改行を示す）。

このように、「組織づくり」の過程で、児童・生徒が政治的に公平な手続きを学習できるような指導が求められていると言える。

以上の2点から、今後、児童会・生徒会活動において全児童・生徒一人ひとりの自主的、実践的な活動がより一層推奨されていくと言えるだろう。児童・生徒が当事者意識を持って活動を組織することが求められており、当然のことながら教師はそのことを認識した上で適切な指導を行う必要が出てくるのである。

これらを受け、既述の教職課程コアカリキュラムにおいても、児童会・生徒会活動に関する一般目標、到達目標として次の事項が挙げられている。

(1) 特別活動の意義、目標及び内容

一般目標: 特別活動の意義、目標及び内容を理解する。

到達目標: 4) 児童会・生徒会活動, クラブ活動, 学校行事の特質を理解している。

(2) 特別活動の指導法

一般目標: 特別活動の指導の在り方を理解する。

到達目標: 3) 合意形成に向けた話し合い活動, 意思決定につながる指導及び集団活動の意義や指導の在り方を例示することができる。

(文部科学省初等中等教育局教職員課 2017: 103 より抜粋)

(岡邑)

2. 映画版『コクリコ坂から』の概要

児童会・生徒会活動は特別活動の教育内容の中でも、教職志望の大学生においてさえ参加の度合いに差が出やすい内容であるため、特別活動の指導法の授業では、子どもが主体的に関わっている活動のイメージを共有する必要がある。そこで本稿が教材として着目するのがスタジオジブリ制作による長編アニメーション映画『コクリコ坂から』³である。

本作は2011年に公開された。原作は1980年に講談社『なかよし』1～8月号誌上に連載された少女漫画『コクリコ坂から』(原作: 佐山哲郎, 作画: 高橋千鶴)であり、映画化は、脚本: 宮崎駿・丹羽圭子, 監督: 宮崎吾朗によってなされた。

映画版のあらすじは以下の通りである⁴。舞台は1963年の横浜である。主人公の松崎海(高校二年生)は父で船乗りであった澤村雄一郎を朝鮮戦争最中の1952年にLST(揚陸艦)の爆発によって失っており、母であり大学助教授である松崎良子は研究のために渡米中である。海は母方の実家のある横浜で「コクリコ荘」を切り盛りしており、毎朝、父に教わった信号旗の掲揚を日課としている。海が通う私立港南学園では、文化部の部室棟である清涼荘、通称カルチェラタンを存続させるべきか、解体するべきかの討論が生徒間で行われている。海は、カルチェラタン存続運動の中心人物であり校内新聞「週刊カルチェラタン」編集長である風間俊(高校三年生)、生徒会長であり俊の親友である水沼史郎(高校三年生)と知り合いになる。きっかけは彼らが中心となった学校への抗議の一つである「伝統の飛び込み」(カルチェラタンの屋根から地上の防火用排水槽への飛び込み)であった。海は「週刊カルチェラタン」のガリ切りを手伝うなど、徐々に新聞部の活動や生徒会活動を知ることになる。そしてカルチェラタン存続の全学討論集会の様子に触発され、カルチェラタンを掃除することによって、その魅力を生徒に知ってもらうことを俊らに提案する。大掃除が始まり、その過程で、海と俊は惹かれ合うようになるが、俊の実の父もまた澤村雄一郎ではないかという兄妹疑惑が生じる。その後、二人の出生の真相解明と恋の行方、そしてカルチェラタンの存続問題が同時進行し、ラストでは二人の父親は異なっていたことが明らかとなり(俊の父親は澤村の親友である立花洋であったが事故死し、母やその他の親戚も亡くなってしまったため、澤村が引き取り、船乗り仲間の風間のもとへ養子に出した)、また、先輩から理事会と交渉したらどうかとアドバイスを受け、水沼、俊、海が港南学園の理事長に直談判に向かい交渉することでカルチェラタンの存続が決定する。

映画版のうち、海が学園紛争の中で俊や水沼と知り合い、俊との出生の秘密を抱えながらも最終的

に解決するストーリーは原作通りだが、1963年の横浜という設定、カルチャータン存続問題という学園紛争の内容は、映画化の過程で付け加えられたものである。脚本化に際して宮崎駿は以下のように説明している。

1980年頃『なかよし』に連載され不発に終わった作品である（その意味で「耳をすませば」に似ている）。高校生の純愛・出生の秘密のものであるが、明らかに70年の経験を引かず原作者（男性である）の存在を感じさせ、学園紛争と大衆蔑視が敷き込まれている。少女マンガの制約を知りつつ挑戦したともいえるだろう。／結果的に失敗作に終わった最大の理由は、少女マンガが構造的に社会や風景、時間と空間を築かずに、心象風景の描写に終始するからである。／少女マンガは映画になり得るか。その課題が後に「耳をすませば」の企画となった。「コクリコ坂から」も映画化可能の目途が立ったが、時代的制約で断念した。学園闘争が風化しつつも記憶に遺っていた時代には、いかにも時代おくれの感が強かったからだ。／今はちがう。学園闘争はノスタルジーの中に溶け込んでいる。ちょっと昔の物語として作ることができる。／「コクリコ坂から」は、人を恋うる心を初々しく描くものである。少女も少年達も純潔にまっすぐでなければならぬ。異性への憧れと尊敬を失ってはならない。出生の秘密にもたじろがず自分達の力で切りぬけねばならない。それをてらわずに描きたい。／〔中略〕／「コクリコ坂から」は、1963年頃、オリンピックの前の年としたい。47年前の横浜が舞台となる。団塊の世代が現代っ子と呼ばれ始めた時代、その世代よりちょっと上の高校生達が主人公である。首都高はまだないが、交通地獄が叫ばれ道も電車もひしめき、公害で海や川は汚れた。1963年は東京都内からカワセミが姿を消し、学級の中で共通するアダ名が消えた時期でもある。貧乏だが希望だけがあった（宮崎駿 2011: 7-8, 下線・中略引用者、／は改行を示す）。

特別活動の指導法における教職志望学生の児童会・生徒会活動理解を考察する本稿で着目するのは、上記のような意図で原作に加えられた映画版のストーリーやキャラクターの設定、実際のストーリー展開こそが、児童会・生徒会活動への積極的な参加経験に乏しい可能性がある2010年代の大学生にとって、a)当初は生徒会活動に無縁な海（特に活動に反対しているわけでもなく、他の女子と同様に関心がない様子）の視点から生徒会活動を観察し、参加し、その活動の有効性を追体験できるというリメディアル、b)本作品のテーマが高校生の恋愛ものと捉えられやすく、作品全体を俯瞰する視点が自力では掴みづらいため、特別活動の指導法の授業として、時代設定の意味や、生徒会活動や学生紛争に励んだ当時の生徒の心性、その後の生徒会活動の衰退理由、現代の児童会・生徒会活動の可能性等の考察事項を誘発させやすい、といった特徴から教材としての可能性を生むと期待されるためである。

以下、a)について3章で、b)について4章で、絵コンテ（宮崎吾朗 2011）、脚本（宮崎・丹羽 2011）等を参照しながら詳述する。

3. 海による生徒会活動の観察と参加

広田照幸は、戦後しばらくの間、①社会の側が高校生を「大人」として扱っていた部分があり、失敗を許容しつつ、生徒に責任を与えて自立的に行動させる教育観が存在していた（広田 2015: 158）、②エリート教養主義的な旧制高校の学生文化が、旧制中学を經由して、新制高校に受け継がれ、高校生の文化の中に「大人」たるべく背伸びをしていた部分があった（同上: 160）、③同年代の多くが中学卒で「社会人」になっており、「就職している者」という比較対照集団を持っていたこと（同上: 160）から、「高校生はもう少し大人びた存在だった」（同上: 158）と述べる。しかし、60年安保と60

年代末の学園紛争の二つの歴史的事件を通して、行政や司法による教育的配慮のもとで、高校生が政治から意図的に遠ざけられ、特に1969年10月の文部省初等中等局長通知「高等学校における政治的教養と政治的活動について」において高校生が政治的な活動に触れること自体が望ましくないとされた(同上: 162-163)。映画版『コクリコ坂から』が描く生徒会活動やカルチェラタンの生徒の動向は、広田が述べる「自治的な生徒会活動や、新聞部・文芸部などのサークルも盛んだったし、総合雑誌や教養主義的な本に親しむ者も少なくなかった」(同上: 160) 状況に合致している。

しかし、作品の主人公である海は、当初は学園紛争や生徒会活動からは無縁(特に活動に反対しているわけでもなく、他の女子と同様に関心がない様子)である。「伝統の飛び込み」で俊と出逢うカット⁵は、海が学園紛争に励む男子たちの「いつもの調子」に気付かず、巻き込まれる場面でもある(表1)。

表1 「伝統の飛び込み」における海と俊の出逢い

カット	内 容		カット	内 容	
	主に絵についての説明 (カットごとのカメラワークや キャラクターの動き、 補足的な心理状態の解説など)	主にカットのセリフ、効果音や 音楽(BGM)についての指示		主に絵についての説明 (カットごとのカメラワークや キャラクターの動き、 補足的な心理状態の解説など)	主にカットのセリフ、効果音や 音楽(BGM)についての指示
143	揺れるばかりの水面 俊の姿はない		148	俊を引き上げている海 すかさず写真部員が寄ってくる	
	突然、ブハーッと海の目の前に 浮上する俊		149	言いつつ、ポジションをとる2人	写真部員 「お二人さん、こっち向いて」
144	ブルブルと頭を振り、目の前の 海に気づく		150	呆然とする海 ニッと笑う俊	SE カシャカシャ
	自分でもなぜだか分からない ままに、俊を見つめる海			海、笑っている俊に気づき 身を起こしつつ、パッと手をは なす	
145	驚いたような顔で海を見つめる 俊		151	そのまま後ろに倒れる俊 パッと歩み去る海	
146	思わずという感じで海に手をの ばす俊 奥でかたずを飲んで見守るギャ ラリー			再び派手な水しぶき	SE ドボーン
	思わずその手をにぎる海 ギャラリーがいっせいに歓声を あげる	ギャラリー 「オー!!!」	152	足早に席に戻り、腹立たしそ うに座る海	信子 「すごかったね!」 悠子 「メル、大丈夫?」
147	カルチェの窓々でも住人たちが 歓声をあげている	住人たち 「オー!!!」 「いいぞー!!」 「伝統の復活だ!!!」	153	恥ずかしさと、腹立たしさの 入り交じった顔で箸をとりながら	海 「バカみたい!」
			154	腹立たしそくにパクつく海 奥では俊が引き上げられている (チラッと海を見ている)	

出典) 宮崎吾朗(2011: 57-60)を引用者改変

注1) 一棹が一コンテを意味する。以下同様。

注2) 撮影、カメラワーク、作画、美術、仕上げ、効果、音響、編集等の記述は省略した。以下同様。

この出逢いを機に「週刊カルチェラタン」のガリ切りを始め、俊や水沼と親しくなった海は、初めて「全学討論集会」として生徒会活動を観察することとなる。海は「会場の最後列の壁ぎわ」において、前方のカルチェラタンの取り壊し賛成派と、反対派であるカルチェラタンの住人である男子たちの喧噪によって状況を掴み兼ねつつも、政治的なパフォーマンスそれ自体を楽しむ男子の様子やその荒れ具合、暴徒化していないか等の指導に回る教官の目から集会を守るために生徒会長の水沼の合図によって一丸となって合唱の練習に見せかける、といった一連の儀式を目の当たりにする(表2)。

表2 海の全学討論集会への初参加

カット	内 容		カット	内 容	
	主に絵についての説明 (カットごとのカメラワークや キャラクターの動き、 補足的な心理状態の解説など)	主にカットのセリフ、効果音や 音楽 (BGM) についての指示		主に絵についての説明 (カットごとのカメラワークや キャラクターの動き、 補足的な心理状態の解説など)	主にカットのセリフ、効果音や 音楽 (BGM) についての指示
415	ヤジ、その他で騒然とした堂内 扉がゆっくり開き		422	空の脇にすべりこんでくる海 ガヤ 「精神主義こそ七国の道だ！」 「そうだそうだ！」 「何が歴史的必然だ!!!」 「知ったような口をきくな！」 「黙れと言ってるだろ！」	「聞こえんぞー！」 「ぐー」 「賛成！」 「反対！」
	中をのぞきこむ海				
416	騒然としている堂内、扉のところで 呆然としながら覗いている海 (会場内の後方、穏健派多し)		423	空、となりにきた海に気づき 海、壇上を見ている	空 (意外!!)「お姉ちゃん！」
	壇上の発言者 C417~419を通して 「東京オリンピックを来年にひかえ、我が国は大きく生まれ変わろうとしています！古いものはどんどん取り壊され、新しい社会が建設されているのです」				
417	全学討論会、討論は灼熱化している。 壇上で推進派が熱弁をふるい、聴衆はあるものは挙手をし、立ち上り、発言をもとめ、まわりと口論し、騒然となっている。	ガヤ 「いいぞ!!!」 「そのとおり！」 「何がオリンピックだ、只の運動会だろ!!!」 「議長、発言させろ！」 「ハイ!!!ハイ!!!」 「ガラクタ屋敷に価値などあるか！」 「なにをー!!!」	424	壇上の発言者、かなり逆上している	壇上の発言者 「アンケートを採った結果、建替賛成は711名、これは80%の生徒が建替え案を支持していることを表しています！」
	前列の方で、過熱しているカルチュの住人たち (帽子が目立つ)	カルチュの住人たち 「発言、発言!!!」 「体制側の手さきめ！」 「議長！発言!!!」 「異議アリ！」 「明治以来の伝統を何だと思ってる！」 「OBに顔むけできるか！」		俊、長椅子の上に勢いよく立ち上り、大笑い 壇上を見据えながら豪快に周囲、俊を見る 俊の笑い声で会場が静まる	壇上の発言者 「学校側の計画を受け入れるべきだと思えます！」 俊 「ワハハハハハハハハハハ!!!」
418	「中身の無いことをべらべらしゃべるな！」		425	俊に気づき、あっとなる海	
	いきり立つ見るからに運動部の連中 (色黒?)	推進派 「カルチュ！静粛にしろ！」 「時代遅れの懐古主義者！」 「新しい部屋をよこせ！」 「汗こそが青春だぞ！」 「そうだそうだ!!!」 「ウス!!!ウス!!!」 「古物に価値などあるか！」		強烈なあざけり	俊 「君たちは保守党のオヤジ共のようだ!!学生なら堂堂と自己の真情をのべよ!!!」
419	司会者の水沼、平然となりゆきを見ている		426	ヒステリックに怒鳴る発言者	壇上の発言者 「ルールを守れ！発言中だぞ！」
	壇上の発言者 C420~423 通して 「我が校においても、カルチュラタンを取り壊し新たなクラブハウスを建設することは、歴史的必然であり、大半の学生の望むところであります」			427	立ち上る弁論部長 (会場動きが止っている)
420	ガヤ 「議長！ハイ！ハイ！」 「異議あり！」	「最後まで聞け！」 「本当に母校を愛するなら、建学の精神を愛せ！」 「静聴~!!!」 「カルチュは偉大な遺産だぞ！」	428		一斉に立ち上る推進派 再び沸き起こる怒号
	キョロキョロと俊の姿を探している海 会場の最後列の壁ぎわで、呆然としている空とその友人に気づく (なにしろ1年生になったばかりの空。討論会を見るのは初めてののだ)	ガヤ 「進取の気概こそ我が校の精神だ!!!」 「カルチュは学究の場だぞ！」 「新しければ何でもいいのか！」 「カルチュ黙れ！」 「静聴！静聴！」 「聞こえないわー！」 「いやよね、古くさい男子って」 「そうそう」		429	やりかえず弁論部長とカルチュの住人たち
421	キョロキョロと俊の姿を探している海 会場の最後列の壁ぎわで、呆然としている空とその友人に気づく (なにしろ1年生になったばかりの空。討論会を見るのは初めてののだ)	ガヤ 「進取の気概こそ我が校の精神だ!!!」 「カルチュは学究の場だぞ！」 「新しければ何でもいいのか！」 「カルチュ黙れ！」 「静聴！静聴！」 「聞こえないわー！」 「いやよね、古くさい男子って」 「そうそう」	カルチュの住人たち 「時勢ばかり気にする御都合主義者!!!」 「女子とキャーキャーやりたいだけだろ！」 「運動バカ!!!」 「文化を尊重せずに、何が発展だ!!!」 「伝統をないがしろにするな!!!」 「議論をつくせ！」		

カット	内 容		カット	内 容	
	主に絵についての説明 (カットごとのカメラワークや キャラクターの動き、 補足的な心理状態の解説など)	主にカットのセリフ、効果音や 音楽 (BGM) についての指示		主に絵についての説明 (カットごとのカメラワークや キャラクターの動き、 補足的な心理状態の解説など)	主にカットのセリフ、効果音や 音楽 (BGM) についての指示
432	一生懸命のびあがって前方で何が起きているか見ようとする海 しかし、後列の方でも立ち上る学生多く、何も見えない	ギャ 「多数者の意見を無視する方が反動だ!!」 「いいぞー、徹底的にやれ!!」 「採決しろ!!」 「負けるなカルチェ!!」 「こんなの討論じゃないわ!!」 「やめなさいよー!!」 「キャー!!」 「ゲラゲラゲラゲラ」 「ワハハハハハ」 「議長!そいつらを黙らせる!!」	443	俊のズボンに手がのびて、引きずられている	推進派 「降壇しろ!!」 「無駄な抵抗だぞ!!」
		俊、自分から人の波の中に飛び込む	俊 「ヤー!!」		
		入れ替わりに壇上に駆け上るものが殺到し、 (舞台袖からも来る)	ギャ 「発言!!」 「発言だ!!」 「俺にもしゃべらせろ!!」 「ワーイ!!」		
		勝手に発言し始める 口論する者、笑って両手を振り回しているバカもいる もはや収拾不能	「新しい部屋の必要性は火を見るより」 「オーイ」 「まじめにやれー」 「グランドで着がえるのは嫌だー!!」 「女子部と同じ部屋にすべきです!!」 「ゲラゲラゲラ」 「カルチェラタンの歴史は我が学園の…」		
433	怒号と笑い声と悲鳴が高まる中、壇上を睨みつけている俊				
	俊、急にグッと身をかがめ、				
	ジャンプ!				
434	俊、長椅子の背を八艘飛びに、壇上におどりがあがる (実際はホップステップジャンプで)				
			444	海、背伸びするが、もはや何が何だか判らない。	「何やってんのよ男子!!」 「皆、壇から降りなさいよ!!」 「うるさー!!」 「司会者何とかしろー!!」 「ゲラゲラ」 「バカー!!」
		舞台上で着地	445	水沼、クールに腕時計を見て	
435	俊すっくと立ち上り会場に向けて	俊 「古くなったから壊すというのなら、君たちの頭こそ打ち砕け!!」 壇上の発言者 「発言中だ!降りろ!!」		正面ドアを見る	
			446	会場後方の正面ドアが開き、学生が1人飛びこんできて、 ドアを閉めつつ水沼に合図する	
436	俊、かまわず湧きあがってくる野次	俊 「古いものを壊すことは過去の記憶を捨てることと同じじゃないのか!??」	447		水沼、サッと姿勢を正して舞台中央に進み出る。と共に動きが止まる舞台周辺の生徒たち。叫声も静まっていく
437	俊の言葉にうたれている海。	俊 「人が生きて死んでいった記憶をないがしろにするということじゃないのか!??」	448	素晴らしいテノール(美声!)で歌い始める水沼 (キモチあおりで)	水沼♪ 「白い花が咲いてた〜」
438	より激しく	俊 「新しいものばかりに飛びついて、歴史をかえりみない君たちに未来などあるか!!」	449	もみあっていた俊たちも、呼応するように声を合わせて歌っている	合唱♪ 「ふるさとーの遠い夢の日〜」
439	少しウルッとしている海 野次とかなきり声がかぶり、俊の台詞も聞き取りにくい	俊 「少数者の意見を聞こうとしない君たちに、民主主義を語る資格はない!!」	450	水沼の後ろで壇上の連中も肩を組んで歌っている	合唱♪ 「さよなら〜と言ったら〜」
			451	正面のドア開き、指導教官が2人入ってくる 場内全員起立して合唱している	合唱(混声)♪ 「黙〜ってうつむいて〜たー」
440	中央通路に出ている推進派が叫ぶ	推進派 「議事妨害だ!!排除しろ!!」	452	海と空もドギマギしながら歌っている	合唱(混声)♪ 「おさげがみ〜」
	ウォーッと壇に押し寄せる推進派		453	ゆっくり中央通路を進んで行く教官ふたり(クールな中年と運動着姿の体育会系)	合唱(混声)♪ 「悲しかったあの時のー」
441	哲研部長を中心にスクラムで阻止しようとする住人	哲研 「スクラムー!!」	454	教官2人立ち止まり、周りを見まわし、眼光するどく舞台を見る	合唱(混声)♪ 「あの白い花だよー」
	そこに殺到する推進派	推進派 「排除ー!!」	455	余裕で独唱する水沼	水沼♪ 「悲しかったあの時のー」
442	激しいもみあい (ラグビーのモールの感じで) しかし、決して手は出さない	哲研 「ひるむな!!押しかえせ!!」	456	ニヤッと笑う教官ふたり	水沼♪ 「あの白い花だよー」
				きびすを返して戻っていく (若い中年を先に行かせる)	

出典) 宮崎吾朗 (2011: 152-165) を引用者改変

俊の「古くなったから壊すというのなら、君たちの頭こそ打ち砕け！」「古いものを壊すことは過去の記憶を捨てることと同じじゃないのか！？」「人が生きて死んでいった記憶をないがしろにすることじゃないのか！？」「新しいものばかりに飛びついて、歴史をかえりみない君たちに未来などあるか！！」（カット 435～438）という発言への共感と俊への好意から、海はカルチェラタンに興味を抱き、大掃除を提案・実施した。これが女子の支持を獲得し、カルチェラタンは存続につながっていく（『週刊カルチェラタン』でも、「カルチェラタンに行こう！！」「女子生徒の過半数取り壊しに反対！！か」「カルチェラタン存続に全生徒の半数が賛成！！」（カット 809）といった見出しが見られるようになる）。

このようなストーリー展開から、視聴者は、当初は生徒会活動に無縁な海の視点から生徒会活動を観察し、参加し、その活動の有効性を追体験でき、生徒会への積極的参加経験のない学生に対してリメディアルの機能をもたらすと推測される。広田は、価値の多元化が尊重される社会において公教育が果すべき成果は「多様な意見や主張を民主主義のルールに沿って闘わせる、アクティブな市民が社会を構成すること」であるとしている（同上: 167, 図3）が、映画版『コクリコ坂から』における海と生徒会活動の関係は、父の死を心に抱えた海が市民性を獲得していく姿が一つの筋を成しているとも言え換えられる。

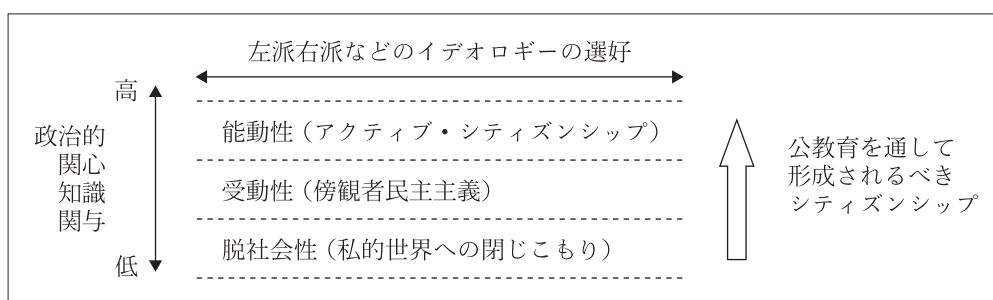


図3 公教育における政治教育のモデル（広田 2015: 167）

4. 『コクリコ坂から』における「私的問題／公的問題」をどうみるか

(1) 「私的問題／公的問題」からみた兄妹疑惑発覚後のストーリー展開

海の視点から生徒会活動を眺め、そのままこの作品を見終えた場合、カルチェラタン存続問題は、海と出逢うきっかけとして位置付くことになるだろう。

しかし、実際のカットを海と俊の出生の秘密や恋愛に関わる「私的問題」、カルチェラタン存続運動や「週刊カルチェラタン」の発行という学校生活における「公的問題」、その他に分けると、兄妹疑惑発覚後のストーリー展開は別様に見える。カット 713～728 において俊は海に対して、二人の父親が澤村雄一郎であることを伝える。その後からラストカットまでのカット 729～1137 は、「私的問題」が 172 カット (42.0%)、「公的問題」が 176 カット (43.0%)、その他 61 カット (14.9%)⁶ となっている。すなわち、「出生の秘密」というモチーフが持ち込まれて以降の展開において「私的問題」と「公的問題」はほぼ同カット数で扱われている。

この背景については、2 章でも宮崎駿の言を引用したが、「出生の秘密」の取り扱いについては次のようにも述べている。

出生の秘密については、いかにもマンネリな安直なモチーフなので慎重なとりあつかいが必要である。いかにして秘密を知ったか、その時ふたりはどう反応するか。／ふたりはまっすぐに進む。心中もしない、恋もあきらめない。真実を知ろうと、ふたりは自分の脚でたしかめに行く。簡単ではない。そして戦争と戦後の混乱期の中で、ふたりの親達はどう出会い、愛し生きたかを知っていくのだ。昔の船乗り仲間や、特攻隊の戦友達も力になってくれるだろう。彼等は最大の敬意をふたりに払うだろう（宮崎駿 2011: 11, /は改行を示す）。

つまり、海も俊も多少たじろぎはするが、カルチュラタン存続問題も並行して解決に向かう点が、兄妹疑惑発覚後の展開の鍵となっている。

このような映画化に際する制作意図の直接的なメッセージになっているのが、海に兄妹疑惑を伝える最中で俊が「吐き捨てるように」述べる「まるで安っぽいメロドラマだ」という台詞である（カット 719）。この台詞は原作漫画においては、俊に振られた海に、俊へのあてこすりとして手を出そうとする不良の広瀬真の彼女が、俊と海の兄妹疑惑の会話を偶然耳にして「まるで三流メロドラマだわ」と一人でつぶやくコマで登場する（高橋・佐山 1980b: 90）。原作では脇役が第三者的、俯瞰的な視点から使用している台詞を、映画版では準主人公の俊の台詞としている点に、「出生の秘密」に原作以上の奥行きを出そうとする意図が明らかである。

（2）「私的問題／公的問題」の一方にのめり込み過ぎていない俊

「私的問題／公的問題」という視点に立った場合、海は「父の死」という私的問題をストーリー冒頭から抱え続け、そこにカルチュラタン存続問題や俊の存在が風穴を開けていく。それに対し、本作品において一貫してどちらか一方にのめり込み過ぎていないのが俊である。

宮崎駿は、俊と水沼のキャラクター設定について、以下のように述べている。

学園紛争についても、火つけ役になってしまった自分達の責任を各々がはっきりケジメをつける。熱狂して暴走することはしない。何故なら彼等には、各々他人には言わない目標があり、その事において真摯だからである（宮崎駿 2011: 9）。

絵コンテを確認すると、確かに俊は、毎朝旗を揚げる少女として海のことを当初から認知している、カルチュラタン存続問題に対して「(集会は) いつもあんなものさ」(カット 459)、「あいつら、ホコリも文化だって言うからなぁ…」(カット 466)と状況を俯瞰する視点を持っている(表 3)、「家が貧乏だから、国立ねらい」と進路が定まっている(カット 931)、「週刊カルチュラタン」については「カルチェの問題が片付いたら後輩にゆず」ろうと考えている(カット 932)、等の状況にある。また、兄妹疑惑が生じた際も、原作では二人で役所に出向いているが(高橋・佐山 1980b: 91-92)、映画版では海に相談することもなく「市役所に戸籍も調べに行」き(カット 721)、兄妹であると信じて海と距離を置こうとする。4章(1)節において、兄妹疑惑発覚後も「私的問題／公的問題」が並行してストーリー展開する特徴に触れたが、この特徴はとりわけ俊のキャラクターによってもたらされているとも言える⁷。

表3 集会後の俊と海のカルチャータンに関する会話

カット	内 容		カット	内 容	
	主に絵についての説明 (カットごとのカメラワークや キャラクターの動き、 補足的な心理状態の解説など)	主にカットのセリフ、効果音や 音楽 (BGM) についての指示		主に絵についての説明 (カットごとのカメラワークや キャラクターの動き、 補足的な心理状態の解説など)	主にカットのセリフ、効果音や 音楽 (BGM) についての指示
458	俊, 少し歩みをゆるめた海に並 びながら (俊, ガリ版持っている)	俊 「集会おどろいた？」 海 「とてもおもしろかったです。 みんな凄いわ」	465	(徐々に海が見えなくなっていく)	海 「古いけれどとってもいい建物 だもの」
		俊 「いつもあんなものさ」			海 「きれいにして、女子を招待し たら、みんな素敵な魔窟だっ て思うわ」
459		俊 「80%の生徒が建て替えに賛 成じゃ、水沼も動きがとれない」		海, 楽しそうに!	海 「私がそうだったもの」
	俊, 嘆息ぎみに			海, 少しはずかしそうに	
〔中略引用者〕					
463	思案顔の海		466	俊, そりゃ面白い, という感じで, (石積だんだん高くなる感じで)	俊 「掃除か…」
	ふいに俊を見て	海 「あのね, お掃除したらどうか しら?」			俊 「でも, あいつら, ホコリも文 化だって言うからなあ…」
464	意外な言葉に?となる俊				

出典) 宮崎吾朗 (2011: 165-168) を引用者改変

(3) 2010年代の学生にとっての青少年の「私的問題／公的問題」

今田雄三は、大学院生 58 名に対し、過去の時代を描いた映画版『コクリコ坂から』を題材として、当時の社会状況に即してかつての子ども像に触れ、現代の子どもとの違いを感情レベルで実感し、現代の子どもがどのように生きるべきかを考察させる試みを行っている (今田 2014)⁸。そのうち、ストーリー展開に関連する質問事項として、「最も印象に残っているシーン」の上位 4 つのシーンは「路面電車の停留所で、主人公の海が俊に好きだと告白するシーン」(12 名, 20.7%), 「海が母に俊のことを聞き終わった後、大泣きをしながら母に抱きつくシーン」(12 名, 20.7%), 「海が夢の中で亡くなった父親と再会するシーン」(7 名, 12.1%), 「海と俊が、父の親友だった小野寺船長と出会うシーン」(5 名, 8.6%) となっている (同上: 210)。また、映画の結末に対して、「主人公の海と俊が兄妹でなくてよかった」という趣旨の回答が 18 名 (31.0%) で最も多く (同上: 208)、少数ながら挙げられたストーリー内容に対する批判も、「好きになった男女が実は血がつながっていて…というのは韓流ドラマなどと同じ展開で、少し興ざめた」「ストーリーとしては、俊が澤村の子どもでもあった方が面白かったのではないか」(各 1 名) というものであった。

この調査結果から示唆されるように、本作品によって 2010 年代の学生が喚起される関心は海と俊の「私的問題」であり、カルチャータン存続問題を中心とする生徒会活動等の「公的問題」は「私的問題」の後景として見做される傾向にある。鈴木翔は、現代の学校生活における友だち関係の特徴として集団の構成員全員に、その場の同質性への多大な配慮が求められる同調圧力や、友だちと「ぶつからない」ことを最優先する過剰な敏感さを挙げており、現代の青少年の学校生活に対する関心が人間関係に傾斜しがちであることを示唆している (鈴木 2015: 87-88)。その観点から見れば映画版『コクリコ坂から』も、海と俊の関係をめぐる恋愛ものとして扱われることとなる。3 章において、特別活動の指導法における本作品の教材としてのメリットとして、視聴者が海の視点から生徒会活動に対して観察・参加・有効性の追体験ができる点を示したが、これもあくまで父の死や俊との関係という私的問題に思い悩む海の視点に留まるものである。

しかし、2章、4章(1)(2)節で確認してきたように、本作品の原作書き換えの意図や、実際のストーリー展開は、「少女マンガが構造的に社会や風景、時間と空間を築かず、心象風景の描写に終始する」傾向を戦略的に乗り越えようとしているものであり、先に挙げたような学生の視聴反応とはギャップが生じている。

特別活動の指導法の教材としてこのギャップを捉え直せば、映画版『コクリコ坂から』は、学生に高校生の恋愛ものという親しみやすさを抱かせつつ（文学的解釈に寄らずして）、戦後直後生まれ（海と俊は1946、1945年出生と推測される）、朝鮮戦争、高度経済成長期といった時代設定がなされている意味や、生徒会活動や学生紛争に励んだ当時の生徒の心性、その後の生徒会活動の衰退理由、現代の児童会・生徒会活動の可能性等の考察事項を誘発させやすい作品と言えるだろう。（歌川）

5. まとめと今後の課題

本稿では、特別活動の指導法において教職志望学生の児童会・生徒会活動理解を促すための教材として、映画版『コクリコ坂から』の活用可能性とその視点について、制作意図や実際のストーリー展開に着目しながら提示した。児童会・生徒会活動への積極的な参加経験に乏しい可能性がある2010年代の大学生にとって、a)当初は生徒会活動に無縁な海（特に活動に反対しているわけでもなく、他の女子と同様に関心がない様子）の視点から生徒会活動を観察し、参加し、その活動の有効性を追体験できるというリメディアル、b)本作品のテーマが高校生の恋愛ものと捉えられやすく、作品全体を俯瞰する視点が自力では掴みづらいため、特別活動の指導法の授業として、時代設定の意味や、生徒会活動や学生紛争に励んだ当時の生徒の心性、その後の生徒会活動の衰退理由、現代の児童会・生徒会活動の可能性等の考察事項を誘発させやすい、といった特徴から教材としての可能性が期待される。

実際の特別活動の指導法の授業に際しては、教員が、a')学園紛争に関する歴史事項の確認、b')本稿2章、4章(1)(2)節に示したような本作品の制作意図、時代やキャラクターの設定、ストーリー展開を確認することで、学生に公的問題と私的問題双方を視野に入れたメタ的な視点を獲得させる、などの補足を行うことで、筆者らの提案としては、児童会・生徒会活動の理解に関する考察事項(図4)に向かうといった展開が想定できるだろう。

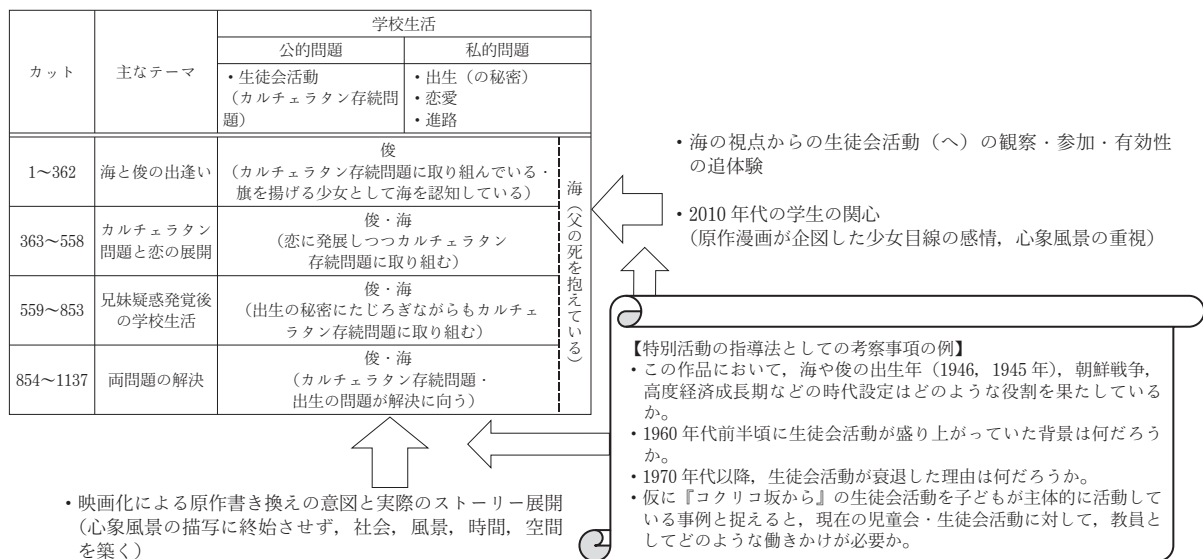


図4 特別活動の指導法における映画版『コクリコ坂から』の教材活用案

本稿の課題として、教職志望学生の映画版『コクリコ坂から』の視聴反応の分析や、視聴後の詳細な授業展開の考察等が挙げられるが、これらについては別稿に譲ることとしたい。(歌川・岡邑)

付記

本稿の執筆にあたり、昭和女子大学の研究助成を受けた。

註

- 1 特別活動の指導法の授業運営に関する研究レビューとして冨岡(2014)がある。また、その後の実践事例として田山(2015)、諏江(2016)、友野(2016)、元根(2017)ほか。
- 2 「特別活動は、学校における様々な構成の集団での活動を通して、課題の発見や解決を行い、よりよい集団や学校生活を目指して様々に行われる活動の総体である。学校教育全体における特別活動の意義を理解し、「人間関係形成」・「社会参画」・「自己実現」の三つの視点や「チームとしての学校」の視点を持つとともに、学年の違いによる活動の変化、各教科等との往還的な関連、地域住民や他校の教職員と連携した組織的な対応等の特別活動の特質を踏まえた指導に必要な知識や素養を身に付ける。」とある(文部科学省初等中等教育局教職員課 2017: 103)。
- 3 映画版『コクリコ坂から』に関する研究や映画評として今田(2014)、古仲(2012)、宗(2013)、土屋(2012)、横田(2012)等が挙げられる。
- 4 以下、あらずじに触れる際は、宮崎・丹羽(2011)による。ただし、海の父である澤村雄一郎について、宮崎・丹羽(2011)では「沢村」と表記されているが、本稿では映画版に合わせ、「澤村」で統一する。
- 5 以下、本文中でカットに言及する場合、すべて宮崎吾朗(2011)による。
- 6 私的問題: カット 740~765, 772~776, 909~914, 925~954, 965~1018, 1045~1048, 1066~1069, 1072~1114, 公的問題: カット 782~849, 854~908, 915~922, 1019~1044, 1049~1065, 1070~1071。ただし、私的問題、公的問題、その他の要素が重複するカットについては、筆者の判断でどれか一つに分類した。
- 7 なお、俊が学園紛争に熱中しているようなドタバタを起こす(表1, 2)一方で、そのような自身の振る舞いを俯瞰する様子(表3)は、特別活動の指導法の授業において、イデオロギーとしてというよりも「進歩的」「ハイカラ」「スマート」等のイメージの魅力によって革新支持に回っていたとされる1960年代前半の革新支持の若い世代や高学歴インテリの心性(竹内 2011)の理解にもつながるだろう。
- 8 このテーマに対し、映画版『コクリコ坂から』がふさわしい理由として「時代設定が適切であること」「当時の様子が比較的正確に描写されていること」「過去に作られたのではなく、現代から過去を振り返った作品であること」「アニメーション映画であることのメリットが期待できること」「主に登場人物の心理過程への共感を磨くのに適切な作品であること」が挙げられている(今田 2014: 205)。

引用・参考文献

- 広田照幸(2015)『教育は何をなすべきか—能力・職業・市民』岩波書店。
- 一盛真・大谷直史(2016)「小・中・高「特別活動」の教育的理解に関する研究—大学生の経験と認識—」『地域教育学研究』8(1), pp. 27-30.
- 今田雄三(2014)「映画鑑賞を用いた過去の青年期像への共感的理解の試み—映画『コクリコ坂から』を題材とした大学院授業の実践から—」『鳴門教育大学研究紀要』29, pp. 199-214.
- 石田美清・古賀一博・三村隆男・藤田武志(2004)「教職課程における「教科以外の活動の指導」に必要な資質能力に関する調査—教育実習担当教員への調査を通じて—」『上越教育大学研究紀要』23(2), pp. 473-485.
- 小玉重夫(2016)『教育政治学を拓く—18歳選挙権の時代を見すえて—』勁草書房。
- 古仲素子(2012)「映画『コクリコ坂から』にみる高校生の政治的活動」『研究室紀要』(38), pp. 93-98.
- 宮崎吾朗(2011)『スタジオジブリ絵コンテ全集 18 コクリコ坂から』徳間書店。
- 宮崎駿(2011)「企画のための覚書「コクリコ坂から」について「港の見える丘」」宮崎駿・丹羽圭子『脚本コクリコ坂から』角川書店, pp. 7-13.
- 宮崎駿(企画・脚本)・宮崎吾朗(監督)(2012)『ジブリがいっぱい COLLECTION コクリコ坂から (DVD)』

- ウォルト・ディズニー・スタジオ・ジャパン。
- 宮崎駿・丹羽圭子（2011）「脚本コクリコ坂から」『脚本コクリコ坂から』角川書店，pp. 19-149.
- 文部科学省（2008/2010 一部改正）『中学校学習指導要領』
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/chu/_icsFiles/afiedfile/2010/12/16/121504.pdf（2017年9月11日参照）.
- 文部科学省（2017a）『小学校学習指導要領解説特別活動編』
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afiedfile/2017/06/21/1387017_15_1.pdf（2017年9月11日参照）.
- 文部科学省（2017b）『中学校学習指導要領解説特別活動編』
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afiedfile/2017/07/14/1387018_13_2_1_1.pdf（2017年9月11日参照）.
- 文部科学省初等中等教育局教職員課（2017）『教職課程認定申請の手引き（教員の免許状授与の所要資格を得させるための大学の課程認定申請の手引き）（平成31年度開設用）【再課程認定】』
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afiedfile/2017/07/11/1388006_1_1.pdf（2017年9月11日参照）.
- 盛満弥生（2013）「生徒会活動の現状と課題—生徒総会を中心として—」『宮崎大学教育文化学部紀要 教育科学』(29)，pp. 105-111.
- 元根朋美（2017）「特別活動の指導法に関する一研究—学生の理論理解に向けた3分間スピーチ体験の活用—」『帝塚山大学全学教育開発センター紀要』(1)，pp. 41-48.
- NHK（2012）『ふたり／コクリコ坂・父と子の300日間戦争～宮崎駿×宮崎吾朗～』ブルーレイディスク VWBS1352，ウォルト・ディズニー・スタジオ・ジャパン。
- 大日方真史（2017）「教員養成教育における生徒会活動に関する授業の課題—大学における実践事例をもとに—」『三重大学高等教育研究』(23)，pp. 59-68.
- 太田拓紀（2012）「教職における予期的社会化過程としての学校経験」『教育社会学研究』90，pp. 169-190.
- 宗洋（2013）「『コクリコ坂から』におけるカルチュラタンについて—ジブリ映画の歴史から眺めて—」『人文科学』(19)，pp. 1-7.
- 諏江康夫（2016）「教職課程科目「特別活動の指導法」の一考察」『北翔大学教育文化学部研究紀要』(1)，pp. 101-111.
- 鈴木翔（2015）「友だち—「友だち地獄」が生まれたわけ—」本田由紀編著『現代社会論—社会学で探る私たちの生き方—』有斐閣，pp. 79-101.
- 高橋千鶴・佐山哲郎（1980a）『コクリコ坂から①』講談社。
 ————・—————（1980b）『コクリコ坂から②』講談社。
- 竹内洋（2011）『革新幻想の戦後史』中央公論新社。
- 田山修三（2015）「特別活動の現状と指導の在り方—具体的な指導法の一考察—」『北海道教育大学紀要教育科学編』66(1)，pp. 23-39.
- 富岡勝（2014）「教職課程科目「特別活動の理論と方法」に関する考察」『近畿大学教育論叢』26(2)，pp. 69-89.
- 友野清文（2016）「学校教育における特別活動の意義—教職科目「特別活動の研究」の実践から—」『現代教育研究』(1)，pp. 48-60.
- 土屋博映（2012）「アニメ『コクリコ坂から』のメッセージ研究」『コミュニケーション文化』(6)，pp. 98-115.
- 山田真紀（2017）「生徒会活動の人間形成機能についての実証的研究—滋賀県の公立A中学校における質問紙調査を中心に—」『日本特別活動学会紀要』(25)，pp. 39-48.
- 横田正夫（2012）「日韓の長編アニメーションの心理分析—「Green Days～大切な日の夢～」と「コクリコ坂から」—」『研究紀要』(84)，pp. 95-111.

（うたがわ こういち 初等教育学科）

（おかむら えい 甲子園大学栄養学部栄養学科）